

論壇

伊藤 元重

選択の自由確保こそ重要

最近、小学校で英語を教えるべきかどうか議論になることが多い。小学校での英語教育に積極的な人たちは、早くから英語を教えた方が国際化に対応できる人材が育成できると主張する。これに対して、小学校からの英語教育に消極的な人たちは、子供たちの言語能力はまだ確立していない時期から英語のような言語を教えるよりは、日本語をしっかり教えた方がよいと主張する。

どちらをもっともな意見である。早くから英語を教えた方がよいのか、それとも子供は国語教育に集中すべきであるのかは、たぶん議論の決着をつけることが難しいのではないだろうか。問題なのは、どちらか一方に決着しようという姿勢である。小学生から英語を教えた方がよいのか否かは、簡単に答えが出るような問題ではない。重要なことはどちらかに決めるのではなく、小学生

から英語を学ぶか否か、選択の自由を確保することであるはずだ。

初等教育の最低限の質を確保することは重要なことだ。しかし、すべての国民に対して全く同じ教育内容を押し付けるのは好ましいことではない。小学生から英語を学ぶべきかどうかということも、国全体の決定事項としてではなく、

小学校からの英語教育

一人ひとりの国民が決定する事項とすべきである。早い時期から英語を学ぶ子供があってもよいし、国語に集中する子供があってもよい。

私個人としては、小学校から英語を教えてもよいと考えている。すべての子供が英語を話す必要はないが、それにしても日本人の英語はあまりにも貧弱だ。職業柄、いろいろな国からくる留学生に接する機会が多いが、私がお会いする欧などからの留学生の英語は日本人

の平均よりはるかに高いレベルだ。おそらく彼らは小さいときから英語に接する機会があったのだろう。早くから英語を学んだからといって、彼らの母国語の能力が劣っているとも思えない。

日本の大学生でもせめて一割程度の人は、国際会議に出しても恥ずかしくないような英語を話せるようになってほしい。残念ながら、現状はともそつという状況にはない。もう少し多くの若者が、小学校から英語に接する機会をもっともよいのでは

ないだろうか。

能力ある子供に機会を

スポーツや音楽の世界では、小さい時から英才教育や専門教育をすることが多い。アメリカで活躍しているイチローや松井などの選手は小さいときから野球漬けの生活であったはずだ。そつした英才教育がなければ、今の彼らの活躍はない。音楽家でもそつだろう。ピアノやバイオリンで秀でるためには、小さいときからそれに集中する必要があるはず

だ。

しかし、こつした特徴のある教育を一部の子供に授けていくのは、スポーツや芸術だけではないだろう。

英語や数学のような通常の科目でも、能力のある子供や、やる気のある子供にはより高度な教育を受ける機会を与えるべきである。それもほんの一握りの人のための英才教育だけではなく、一割程度の学生が対象になる特徴のある教育プログラムが必要ではないだろうか。そつした教育プログラムが確立して、初めて多様な人材を育てることができるはずだ。

もう三十年以上前のことだが、アメリカの大学院で数学の講義を聴講していたとき、同じ教室に中学生ぐらいの子供がいた。私たち大学院生と同じように、高度な数学の講義を受けているのだ。おそらく市内の中学生で、特に数学に優れていたのが大学院の講義を受けていたのだろう。こつした光景が日本でも見られるようになることよいのだが。

(総合研究開発機構理事長・東大教授)

*この記事は、静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。